

母子相互作用に伴なう母親の母性・女性性獲得の過程

分担研究者 利 島 保 (広島大学心理学科助教授)
研究協力者 富 永 大 介 (広島大学心理学科助手)
武 内 珠 美 (広島大学心理学科大学院)
(広島市西保健所保健婦)

序

本報告は、今年度行なわれた「母親の乳幼児との相互作用の行動が、乳幼児の社会性及び知的発達に及ぼす効果についての研究」の結果と、今年度の主課題として現在継続研究中である「母子相互作用による母性意識の変容過程に関する研究」の研究の概要の2部に分かれている。

前者の研究は、母子相互作用が子どもの発達におよぼす影響を検討することを実現するための前提となるものとして、後者の研究、すなわち、母親の心理的問題を取り扱かう前に、母親の養育者としての子どもへの働きかけの実態とその効果を、子どもの社会性や認知発達に関しておさえておく必要があると考えて実施したものである。さらに、今年度の研究成果をふまえて、現在継続中の「母子相互作用による母性意識の変容過程に関する研究」についての今後の方針について述べてみたい。

第1部

「母親の乳幼児との相互作用の行動が乳幼児の社会性と知的発達に及ぼす効果」についての研究

問 題

母子相互作用が、乳幼児の種々の行動に及ぼす効果についての研究は、心理学の領域においてはかなり多くの研究が報告されている (Sears, R. R., Maccoby, E. E., & Levin, H. 1957; Johnson, R. C. & Medinnus, G. R. 1965; 古沢 1975)。

母子相互作用という場合は、Medinnus, G. R. (1967)も述べているように、母親の行動的、態度的、人格的諸特性が、子どもの身体生理的、活動的諸特性に影響する方向から考えるだけでなく、子どもが母親に及ぼす影響とそれによって惹

き起こされる母親と子どもの相互性といった方向の検討も必要であろう。

しかし、後者の研究はその必要性が言われながらも、方法論的問題点を多く残しているために最近まで十分な検討がなされていなかったが、1970年代に入り、次第に研究成果が上ってきている (Lewis, M. & Rosenblum, L. A. 1974)。

他方、Yarrow, L. J., Rubenstein, J. L., & Pedersen, F. A. (1975)らは、上述の意味での養育者と子どもの相互性をふまえた研究ではないが、子どもへの養育者の働きかけに含まれる感覚的刺激特性や物理的環境の性質などが、子どもの認知発達に及ぼす効果について研究している。彼らの研究は、養育者の子どもとの相互作用パタンの子どもの認知発達への効果をとらえようとしたところに、母子相互作用の効果性の研究として意義がある。

このような養育者の相互作用パタンと子どもの行動の関係については、過去にも多く出されている (Medinnus, G. R. & Curtis, F. J. 1963; Hurley, J. R. 1965; Hoffman, M. L. 1960; Watson, G. 1957; Bayley, N. & Schaffer, E. S. 1960; Peterson, D. R. et. al. 1959; Bing, E. 1963)。しかし、これらの研究のほとんどは、対象児の年齢が高く、乳幼児についての研究が少ないので十分な参考とならない。

そこで、本研究では、保健所で実施されている1歳半児検診を利用し、1歳半児を持つ母親の子どもへの相互作用のあり方が、子どもの知的発達及び社会性の発達に及ぼす効果について検討することを第1の目的とした。第2の目的は、母親のパーソナリティとの関係がどのようになっているかについての実態を把握することであった。第3の目的は、これらの結果をふまえて、1歳半児検

診で、乳幼児の知的発達及び社会性発達を知る簡易なテスト有効性を検討するとともに、乳幼児の発達を促すに必要な母親の養育態度についての留意点をさぐることにあった。

方 法

対象者：昭和55年12月～56年1月下旬までに広島市西保健所において1歳半児検診に来た母子272組を対象とした。母親の年齢構成は表1に、子どもの性別、兄弟の有無、生下時の問題といった特性については表2に示してある。なお、表2については、調査票の不備によって生じた欠落データは不明分として処理した。

調査項目：本調査は、Ⅰ、母親の子どもとの相互作用に関する4つの項目、Ⅱ、母親のパーソナリティ特性の評定に関する4項目、Ⅲ、子どもの社会性発達に関する6項目について、検診前に各家庭に別紙調査用紙を配布し、検診時に母親に回答したものを持参させた。さらに、幼児に対して検診時に保健婦が面接して、Ⅳ、7項目より成る知的発達テストを実施した。

Ⅰ～Ⅳの調査項目は以下のような内容を含んだものである。

Ⅰ、母親の子どもとの相互作用について（以下MIと略す）

- ① 母親の子どもへの働きかけが、言語型一動作型のいずれのタイプであるか。
- ② 子どものことが気がかりになる型か無関心か（子どもへの関心の神経質傾向）
- ③ 子どもといる時の母親の気分が、落ちついているかイライラするか（母親の相互作用時の情緒状態）
- ④ 子どもの世話をする方かそうでないか（子どもへの接触行動傾向）

Ⅱ、母親のパーソナリティ特性について（以下MPと略す）

- ① 内向的か外向的か
- ② 協調的か非協調的か
- ③ 弛緩的か緊張的か
- ④ 活動的か非活動的か

以上Ⅰ、Ⅱの各項目は別紙の通り4選択肢を設けて回答させた。

Ⅲ、子どもの社会性発達について

社会性の発達については、(A)言語的コミュニケーションの発達に関する3項目と(B)自立性の発達に関する3項目の2種について質問した。

(A) 言語的コミュニケーションの発達（以下S₁と略す）

- ① 母親の言語的指示の理解（別紙Ⅱの1）
- ② 自分の要求の言語表現（別紙Ⅱの2）
- ③ 排泄の伝達（別紙Ⅱの5）

(B) 自立性の発達（以下S₂と略す）

- ① 一人遊びの可否（別紙Ⅱの3）
- ② 依存性の存否（別紙Ⅱの4）
- ③ 母親以外の対象への接触行動の存否（別紙Ⅱの6）

以上の各項目について、ハイ/イイエで回答を求めた。

Ⅳ、子どもの知的発達テスト（以下Cと略す）

- ① 構成能力：2個の立方体（2×2×2cm）を保健婦が積み立てるのをみせた後、子どもに再生させる。
- ② 保存能力：1個の積木をみせ、それをハンカチの下に入れて、積木がどこにあるかをさがさせる。ハンカチの下を探ったり、ハンカチの上から積木をさわったら合格。
- ③ 語彙獲得能力：母親に子どもがいくつくらい言葉を知っているかを聞き、そのうちの1つが言えるか否かで合否判定。
- ④ 文構成能力：母親に子どもがどんな発話ができるかを聞き、それを子どもに発話させ、二語文的構成ならば合格。
- ⑤ 所有意識：子どもの身につけているものをさして、誰のものかを聞き、自分の所有物であることを言語的又は行動的に表現すれば合格。
- ⑥ 手の上下運動の意識的コントロール：保健婦が、鉛筆で紙の上にて書きの線を描いて、幼児に模倣させる。上下への運動ができれば合格。
- ⑦ 手の左右運動の意識的コントロール：鉛筆で横書きの線を描いた場合の、模倣をさせた時の、左右の運動ができれば合格。

以上7つの課題について、可能ならば1点、できなければ0点で、最高7点から最低0点までの

配点で、知的発達得点 C_T を求めた。

調査の整理法：

1組の母子の調査結果及び母親の年齢、子どもの性別、兄弟の有無、生下時の問題の有無の変数を、1枚のコンピューター・パンチカードに打ち込んだ。

なお、集計及びデータ分析上、次の点について、各調査項目について粗データの修正を行なった。

1. MI項目について

MI-1；選択肢番号①を言語型，②以下を運動型とする。

MI-2；選択肢番号①②を神経質型，③以下を無関心型

MI-3；同じく①②を安定型，③④を不安定型

MI-4；同じく①②を多接触型，③④を少接触型

2. MP項目について

MP-1；選択肢①②を内向型，③④を外向型

MP-2；同じく①②を協調型，③④を非協調型

MP-3；同じく①②を弛緩型，③④を緊張型

MP-4；同じく①②を活動型，③④を非活動型

なお、MP-1での内向型と非活動型、外向型と活動型が一致していない母親は、MI項目とMP項目の関係をみる分析からは除外した。

3. 社会性発達得点について

S_1 の得点は、項目①，②，⑤の各得点の計で示し、 S_2 は、項目③，④，⑥の各得点の計で示した。また、社会性発達の総得点 S_T を、 S_1 と S_2 の得点の総計で示し、それぞれの得点を個人ごとに求めた。なお、項目4についてのみ、イエに答えた場合が1点で、ハイの場合は0点とした。

結 果

I. 調査項目の集計結果

MI項目の1～4，MP項目の1～4のそれぞれについて、整理法に述べた2分類法に基づく、母親の反応頻度と $\%$ 値を、MI項目については表

4に示した。

子どもの社会性発達については、各下位項目の反応頻度と $\%$ 値は、表5に示し、さらに S_1 、 S_2 及び S_T の得点分布及び平均値と標準偏差(SD)は、それぞれ表6，表7，表8に示した。

知的発達テストについても、各下位項目の合否の頻度と $\%$ 値を表9に示し、総得点(C_T)の得点分布及び平均値、標準偏差(SD)を、表10に示した。

II. 各調査項目間のクロス集計による分析結果

ここに上げた分析結果は、全項目のクロス集計結果中、統計的に有意なもののみである。

1. MI項目とMP項目の関係について

このクロス分析は、母親の子どもへの相互作用的对応と母親のパーソナリティ特性の関係を明らかにする目的で行なわれた。

その結果、顕著な関係がみられたのは、「母親の子どもへの働きかけが、言語型の動作型か(MI-1)」と母親のパーソナリティ特性のうち「内向型-外向型特性(MP-1)」及び「活動型-非活動型特性(MP-4)」との関係(クロス結果は表11と表12に示す)、「子どもとの相互作用時の母親の情緒状態(MI-3)」とパーソナリティ特性の「協調型-非協調型(MP-2)」及び「弛緩型-緊張型(MP-3)」の関係(クロス結果は表13，表14に示す)であった。

2. MI項目と子どもの社会性発達との関係

ここでは、母親の子どもへの相互作用的对応が、子どもの社会性発達に影響するのは、どのような母子相互作用要因にあるかを知る目的で分析を行なった。

全体的傾向としては、自主性の発達得点(S_2)と「母親の子どもへの接触行動傾向(MI-4)」との間に有意な相関がみられた(表15)。また、社会性発達の総得点(S_T)とMI-4の項目間にも有意な相関が保たれた(表16)。しかし、「子どもの世話をする方」と答えた母親群と「あまりしない」と答えた母親群に分けて、それぞれの群の子どもの S_1 及び S_T の平均値の差をみたところ、有意な差は得られなかった。

3. MI項目と子どもの知的発達の関係

子どもの知的発達テストの得点(C_T)を、各

MI項目における2分類法での母親群を独立変数として、各群での子どもの C_T 得点の平均値の差の検定を行なった。

その結果、「子どもと一緒にいると、気分が落ちつく母親群」の子どもの C_T の平均得点($N=158$, $\bar{X}=5.73$, $SD=1.06$)の方が、「落ちつかない母親群」の子どものそれ($N=111$, $\bar{X}=5.46$, $SD=1.08$)より有意に成績が良かった($t=1.95$, $df=267$, $P\leq.06$)。

4. 子どもの社会性発達と知的発達の関係。

子どもの社会性発達の2側面、言語的コミュニケーション発達(S_1)と自立性の発達(S_2)の各得点と知的発達テスト得点(C_T)との関係を見ると、 S_1 と C_T の関係のみに有意な相関値($r=.125$, $P\leq.01$)がみられた。

5. 対象児の独立変数(性別, 兄弟の有無, 生下時の問題の有無)別にみた、調査項目間のクロス分析について

この分析で、統計的に有意な結果をみたもののみを列記してみると以下ようになった。

a) MI項目と子どもの社会性発達の関係

a) - 1. 上に兄弟を持つ子ども群147名の自立性発達得点(S_2)について、「子どもと一緒にいると気分が落ちつく母親群」の子どもの平均得点($N=84$, $\bar{X}=2.02$, $SD=1.22$)は、「落ちつかない母親群」の子どものそれ($N=63$, $\bar{X}=1.69$, $SD=0.71$)より、有意に成績が良かった($t=1.89$, $df=145$, $P\leq 0.061$)。

a) - 2. 生下時に問題がなかった子ども群231名の社会性発達については、「子どもの世話をよくする母親群」の子どもの総社会性発達得点(S_T)の平均値($N=167$, $\bar{X}=4.75$, $SD=0.91$)は、「世話をしない母親群」の子どものそれ($N=66$, $\bar{X}=4.75$, $SD=0.74$)より、有意に成績が悪かった($t=1.97$, $df=231$, $P\leq 0.05$)。

さらに、これらの群について、「言語型の母親群」子どもの自立性得点(S_2)の平均値($N=88$, $\bar{X}=1.69$, $SD=0.59$)は、「動作型の母親群」の子どものそれ($N=143$, $\bar{X}=1.96$, $SD=1.02$)より、有意に成績が悪かった($t=2.28$, $df=229$, $P\leq 0.05$)。

b) MI項目と知的発達の関係

b) - 1. 男児を持つ母親で、「子どもと一緒にいると気分が落ちつく母親群」の子どもの知的発達テスト得点(C_T)の平均値($N=83$, $\bar{X}=5.76$, $SD=0.93$)は、「落ちつかない母親群」の子どものそれ($N=53$, $\bar{X}=5.45$, $SD=0.88$)より、有意に成績が良かった($t=1.90$, $df=134$, $P\leq 0.06$)。

b) - 2. 兄弟のない、いわゆる一人子群の分析結果では、「子どもの世話をよくする母親群」の子どもの知的発達得点(C_T)の平均値($N=81$, $\bar{X}=5.90$, $SD=0.97$)は、「あまり世話をしない母親群」の子どものそれ($N=29$, $\bar{X}=5.48$, $SD=0.91$)より、有意に成績が良かった($t=2.03$, $df=108$, $P\leq 0.05$)。

6. 子どもの個体変数と社会的発達及び知的発達との関係

a) 女兒群($N=125$)において、社会性発達の総得点(S_T)と知的発達得点(C_T)の間に、有意な正の相関($r=0.155$, $P\leq 0.04$)がみられた。

b) 知的発達得点の性差は、男児群の平均得点($N=136$, $\bar{X}=5.64$, $SD=0.92$)と女兒群のそれ($N=125$, $\bar{X}=5.68$, $SD=1.14$)の間には、有意差はみられなかったが、両群の得点の分散には有意差($F=1.52$, $P<0.02$)があり、両群とも知的発達得点に個人差があることが認められた。

c) 兄弟の有無に関する知的発達得点の平均値の差は、一人子群($N=111$, $\bar{X}=5.79$, $SD=0.96$)と兄弟有り群($N=149$, $\bar{X}=5.57$, $SD=1.07$)の間に、傾向差($t=1.72$, $df=258$, $P\leq 0.86$)があり、前者の方が成績が良い傾向にあった。

d) 生下時の問題の有無に関して、知的発達得点の平均値の差は、問題なし群($N=234$, $\bar{X}=5.69$, $SD=1.02$)と問題あり群($N=14$, $\bar{X}=5.07$, $SD=1.14$)の間に、有意な差($t=2.21$, $df=246$, $P<0.03$)があり、前者の方が知的発達得点が高いことが認められた。

結 論

以上の結果について、本研究の目的に添って考察を簡単に加えて結論すると次のようになる。

1. 母子相互作用のあり方と母親のパーソナリティの関係

内向的な性格特性の母親ほど、子どもに動作の働きかけをよく行なうが、外向的な母親では、働きかけのタイプに特徴がみられない。また、受容的でありリラックスしている母親ほど、子どもとともにいる時に気分が落ちつく傾向が強い。

以上のことは、母親の性格が、母子相互作用のあり方を規定しているといえる。

2. 母子相互作用のあり方が子どもの社会性の発達に及ぼす影響

子どもの社会性の発達には、母親が子どもに対し、あまり手をかけすぎないことが重要で、特に、自立性を育てるには、母親が言葉かけだけで子どもに対応するだけでなく、子どもとともに行動して対応することが必要である。この点でつけ加えることは、母親の性格で、母親自身があまり外向的であるより、物静かな立ち居振舞の日常生活にこころがけ、子どもに対しては、共に行動で反応し合うことが必要と言えよう。

次に、兄弟のいる家庭では、母親の気持ちが落ちついていることが、子どもの自立性の発達を促すことも、母親への留意点と言えよう。

3. 母子相互作用のあり方が子どもの知的発達に及ぼす影響

子どもの知的発達には、母親が子どもと共にいる時の気持ちの安定が、重要な影響をもたらしている。特に、男児の場合には、この点が重要である。

また、一人子の場合、一歳半までの知的発達には、母親の世話の程度が大きく影響している。一般的には、手をかけないようにすることが、子どもの自主性を育くみ、知的発達をのばすと言われているが、本研究では、それとは逆の結果になっている。しかし、逆に考えると、一歳半までの知的発達は、母親が手をかけすぎた結果であり、それ以後の知的発達を保障するものではないとも考えられる。

4. 1歳半児の発達傾向

a) 1歳半の子どもの知的発達は、社会性の発達、特に、言語的コミュニケーションの発達と結びつきが強いことが、本研究の結果から示された。特に、女児の場合にこの傾向が強いことは、女児

の発達が男児のそれに比べ早いという一般的傾向と一致している。

b) また、一人子の知的発達が、兄弟のいる子どもより高いという結果は、一般的に言われていることとは矛盾している。しかし、母親の手のかけすぎが、一人子の知的発達テストの結果に反映しているとすれば、この結果も妥当なものといえる。しかし、兄弟のいる子の場合、母子相互作用のあり方によっては、一人子の場合より、知的発達を妨害することも十分考えられる。すなわち、母親の母子相互作用時における気分の安定のない場合などが、その一例といえよう。

c) 生下時に問題のある子どもでは、問題のない子どもより、知的発達がおくれる原因について、本研究における、母子相互作用の観点からは十分解明できなかったため、今後の検討事項として残る。

5. 1歳半検診時での、社会性発達及び知的発達に関するチェックの有効性の検討

本調査で用いた社会性発達項目及び知的発達テストは、Robson, B. & Minde, K.(1977)の示した、1歳半児の発達基準に基づいて作成されたものである。

本研究の結果でも、社会性発達の各下位項目の通過率が対象児の $2/3$ 以上を示しており、 S_1 、 S_2 、 S_T の得点分布(表5, 6, 7)でも、得点の高い方に偏りがあり、1歳半児の状態をチェックするには適したものであろう。

知的発達テストの下位項目については、構文能力とたて方向の手の制御能力の項目以外は、対象児の $2/3$ が通過している。また、総得点(C_T)の分布をみると(表10)、5点以上に $2/3$ 以上の子どもが入っており、このことを考えると、知的発達テストとして、1歳半検診時に手軽に使用できるものと思われる。

第2部

「母子相互作用による母性意識の変容過程に関する研究」の進行状況報告

問 題

本研究は、母子の相互作用が母親にいかなる影

響をもたらして、母親の母性意識が形成されていくかの過程を検討するために計画された。特に、女性が自分の子どもを持つということは、彼女の心理的生活に今までとは異なった変化をもたらすと考えられる。その意味で、女性が妊娠、出産、育児という母親としての役割を負う時間的経過は、母性意識の形成に重要なものとなる。このような女性特有な変化過程の中に、彼女と子どもの相互作用があるとすれば、それは単に母子の2者間相互作用という枠組ではなく、母子を含む環境と母親という人間との相互作用としてとらえるべきであろう。このような観点から、母親と彼女を含む種々な環境の相互作用の結果として生じる母性意識の変化過程をとらえることは、母子相互作用の研究として必要である。

Wapner (1976) は、人間と環境との相互作用が、時系列に生じる何らかの契機によって、質的に変化することを環境移行 (Environmental transition) と呼んでいる。すなわち、環境移行に直面した人間は、新たな環境事態に適應するために、環境との相互作用を通してその環境を再構成する傾向を持っているというのである。また、人が環境と相互作用する側面として、Wapner (1976) は、物理的環境、对人的環境、社会文化的環境の3側面を考え、それぞれにおいて、人は環境移行の中で、認知的、感情的、評価的心理次元での環境適應を行なうと仮定している。

本研究は、Wapner の環境移行による人間と環境の相互作用による心理的变化の過程についての理論的枠組みに立って、女性が妊娠から育児までの時系列的な環境移行の中で、母親としての適應行動を獲得するメカニズムを母性意識の変化過程ということで検討する。

そこで、妊娠期、出産期、育児期にわたる女性の環境適應の変化過程について、その女性と環境との相互作用の場である3つの側面、すなわち、物理的、对人的、社会文化的側面、それぞれに対する、認知的、感情的、評価的反應を測定し、母親となる女性の各環境移行による心理的構造の変化をとらえることを第1の目的とする。特に、このような母親となる女性の心理的構造において、母子相互作用と関連の深い人と環境の相互作用の

場はどこにあるのか、また、その相互作用の場において、母親となる女性の心理的反應は、どのような次元に表出されるのであろうかという点に焦点化し、母性意識の構造の分析を行なうことにしたい。

第1の目的は、人と環境との相互作用の場ということに焦点をあてて、母性意識をとらえようとするが、これに付随して、母となる女性のパーソナリティ要因、妊娠期の生理的要因、子どもとの相互作用を始める際の心理的枠組の要因、女性としての社会経済的地位の要因といったものが、人と環境との相互作用の場におけるその女性の心理的構造にどのように影響を及ぼすかについての分析を行い、母性意識と女性性とがどのように関連しているか、さらに、自己のパーソナリティ形成に、母性意識がどのように取り込まれていくかについて検討することを第2の目的とする。

方 法

対象者：広島市在住の妊婦100名を対象に、別紙の調査を妊娠期、出産直後、育児期の3期について縦断的に実施する。対象者は、広島西保健所に母子手帳を受け取りに来る女性に対して依頼し、承諾を受けた者に限り、調査用紙の郵送によって行なう。

調査用紙：調査は次の5つの測定変数から成っている。

1. 子どもとの相互作用を始める際の女性の心理的枠組についての測定 (用紙のIに該当)。ここでは、女性と夫が、妊娠を知った時の心理的反應について4つの項目を設けて質問している。

2. 女性と環境との相互作用場での心理的構造の測定。(調査用紙のII~IV)。

この調査項目では、妊婦の相互作用場の3側面について、認知的、情緒的、評価的心理次元を、7ポイント尺度評定によって測定し、各相互作用場及び各心理的反應次元についての多次元尺度解析によって、妊婦の妊娠期、出産期、育児期における環境移行に伴う心理的構造変化を明らかにする。

調査IIは、妊婦の物理的環境での相互作用の測定項目から成っている。(1). つわり (2). 他の人の子ども (3). 自分の体型の変化 (4). ほ乳びん

(イ). ベビー服 (ロ). 胎動 といった妊娠期から育児期にわたって、妊婦がかかわりをもつ物理的対象との相互作用の中で生じる心理的反応を測定する。

反応次元は、下位項目順に、これら6つの対象に対して、(1)気になる一気にならないの評価次元、(2)大切である一大切でないの評価次元。(3)注意がむくー注意がむかないの認知次元。(4)好ましいー好ましくないの情緒次元。(5)快ー不快の情緒次元について、評定させる。

調査Ⅲは、社会、文化的環境での相互作用の測定項目から成っている。

すなわち、日本人の妊婦の多くが、妊娠、出産、育児にかかわって体験するであろう、日本的な文化・慣習である (イ)岩田帯(腹帯) (ロ)宮まいり (ハ)里帰り(出産) (ニ)お食いぞめ (ホ)初節句 (ヘ)安産のお守り (ト)母子手帳 の7対象について、Ⅱと同様の心理的次元についての測定を行なわせる。

調査Ⅳは、对人的環境での相互作用の測定項目から成っている。

すなわち、妊婦をとりまく人的環境、(イ)夫、(ロ)実家の母、(ハ)うまれる子、(ニ)友人、(ホ)近所の人、(ヘ)医師、(ト)夫の母の7対象について、前述の3次元の評定を求める。

3. 妊婦のパーソナリティの変動の測定。(調査用紙のⅤとⅥ)

環境移行に伴う妊婦のパーソナリティに関係する心理的状態を、投影法的方法によって測定することを目的とする。

その第1は、文章完成法テスト(SCT)による測定で、20の下位項目から成る。未完成の文章を完成させ、そこに投影される妊婦の心理的不安、自己及び他者、妊娠・出産等の受けいれの程度について得点化して、個人のパーソナリティ状態を測定すると同時に、「母親になること」の受けいれ状態をみる。(調査用紙Ⅴ)。

第2は、「夢」「不安」「母になること」の3課題についての自由記述から、妊婦の環境移行に伴う心理状態の現象法的分析を行なう(調査用紙Ⅵ)。

以上の測定を変数として、調査項目Ⅱ～Ⅳにあらわれた心理的構造及び環境移行の時期との関連

をみる。

4. 妊婦の身体的状態、特に、妊娠期のつわり得点と相互作用における心理的構造、パーソナリティ状態との関係。

調査項目Ⅶにおいて、妊娠期のつわり得点を算出し、妊娠期の身体的状態が、調査項目Ⅱ～Ⅳにあらわれた心理的構造や、パーソナリティ状態に及ぼす効果を明らかにする。

5. 妊婦の個体変数と諸測定変数との関係。

妊婦の年齢、結婚暦、出産の有無、職業の有無、子どもの出生順位、等の個体変数と、各測定変数の関係を検討し、相互作用に伴う心理的状态に影響する要因を考察する。

研究の進行状況

昭和56年2月末現在、対象妊婦への調査依頼が終わり、第1回目の調査用紙の回収を待つ段階にあり、これらの調査は、同一対象妊婦に約10ヶ月継続して行なう予定である。従って、本研究の結果は、来年度に集計、解析し、報告する予定である。

また、この調査と並行して、10名程度のボランティアの妊婦を対象に、調査項目についての深い面接調査を継続的に行ない、調査にのらない、妊婦の環境移行に伴う心理的变化、母性意識、女性性についての臨床心理学的データを収集する予定である。

REFERENCES

- Bayley, N. & Shaffer, E.S. 1960 Maternal behavior and personality development: Data from the Berkeley Growth Study. *Psychiatric Research Reports*, 13, 155-173.
- Bing, E. 1963 Effect of child-rearing practices on development of differential cognitive abilities. *Child Development*, 34, 631-648.
- 古沢頼雄 1975 発達初期における母子相互作用-新生児・乳児の養育者におよぼす影響を中心に-*教育心理学研究* 23, 250-255.

- Harley, J.R. 1965 Parental acceptance-rejection and children's intelligence. *Merrill-Palmer Quarterly*, 11, 19-31.
- Hoffman, M.L. 1960 Power assertion by the parent and its impact on the child. *Child Development*, 31, 129-143.
- Johnson, R.C. & Medinnus, G.R. 1965 *Child development: Behavior and Development*. New York; John Wiley & Sons.
- Lewis, M. & Rosenblum, L.A. 1974 *The effect of the infant on its caregiver*. New York; John Wiley & Sons.
- Medinnus, G.R. & Curtis, F.J. 1963 The relation between self-acceptance and child acceptance. *Journal of Consulting Psychology*, 27, 542-544.
- Medinnus, G.R. 1967 *Readings in the psychology of parent-child relations*. New York; John Wiley & Sons.
- Peterson, D.R., Becker, W.C., Hellmer, L.A., Shoemaker, D.J., & Quarry, H.C. 1959 Parental attitudes and child adjustment. *Child Development*, 30, 119-130.
- Robson, B. & Minde, K. 1977 Normal child development. In Steinharmer, P.D. & Rea-Grant, Q. (Eds.), *Psychological problems of the child and his family*. Tront; The Macmillan Co. Ltd., 2-28.
- Sears, R.R., Maccoby, E.E., & Levin, H. 1957 *Patterns of child rearing*. Evanston: Row, Petrson.
- Wapner, S. 1976 Environmental transitions. 4th Annual Lucy Sprague Mitchel Memorial Conference. Oct. 30. Reading Paper.
- Watson, G. 1957 Some personality differences in children related to strict or permissive parental discipline. *The Journal of Psychology*, 44, 227-249.
- Yarrow, L.T., Rubenstein, J.L., & Pedersen, F.A. 1975 *Infant and Environment; Early cognitive and motivational development*. New York; John Wiley & Sons.

Table 1. Range of mothers' age

Age	Frequency	%	Cumulative %
21	1	0.4	0.4
22	3	1.1	1.5
23	5	1.8	3.4
24	7	2.6	6.1
25	13	4.8	11.0
26	26	9.6	20.9
27	36	13.2	34.6
28	36	13.2	48.3
29	28	10.3	58.9
30	30	11.0	70.3
31	24	8.8	79.5
32	15	5.5	85.2
33	22	8.1	93.5
34	8	2.9	96.6
35	1	0.4	97.0
36	2	0.7	97.7
37	4	1.5	99.2
39	2	0.7	100.0
Missing	9	3.3	
Total	272	100.0	

Mean : 28.9, SD : 3.14 Range : 18.00

Table 2. Characteristics of infants

Characteristics	Sex		Sibling		Desease of Birth		
	Boy	Girl	Non	Sibling	Non	Weight	Others
Frequency	136	126	111	153	234	14	15
Missing Data	10		8		9		
%	50.0	46.3	40.8	56.3	86.0	5.0	6.0

Table 3. Types of mother's interaction (MI).

Items	Frequency	%
1. お子さんへの働きかけはどうしていますか。		
verbal	101	37.1
action	167	61.4
Missing	4	1.5
2. お子さんの事が気にかかるほうですか。		
anxious	39	14.3
non-anxious	233	85.7
Missing	0	0.0
3. お子さんと一緒にいる時、気持ちが落ちついていますか。		
irritated	111	40.8
calm	158	58.1
Missing	3	1.1
4. あなたは、お子さんの世話をよくするほうですか。		
more caretaker	191	70.2
less caretaker	80	29.4
Missing	1	0.4

Table 4. Traits of mother's personality

Traits	Frequency	%
1. あなたの性格は		
introversion	142	52.2
extroversion	128	47.1
Missing	2	0.7
2. あなたは、どんな人ともうまくやっけていけるほうですか。		
harmonious	241	88.6
stubborn	28	10.3
Missing	3	1.1
3. 物事に対して、気楽に対処していますか。		
relax	164	60.3
tentioned	104	38.2
Missing	4	1.5
4. あなたは活動的ですか。		
active	126	46.3
non-active	143	52.6
Missing	3	1.1

Table 5. Distributions of each item for the development

Table 5. Distributions of responses in each item for the social development test

Items	Frequency	%
1. 「ちょうだい」の言葉に対して対応できますか。 (新聞など、お母さんの指示でもってくれますか)		
yes	269	98.9
no	3	1.1
2. 人に対して「何かして!」と要求しますか。 (自分の要求を伝えようとしませんか)		
yes	271	99.6
no	1	0.4
3. 一人あそびができますか。		
yes	263	96.7
no	8	2.9
Missing	1	0.4
4. 自分の面倒をみてくれる人と一緒にいたがりますか。		
yes	21	7.7
no	250	91.9
Missing	1	0.4
5. 大便やおしっこを、しぐさや言葉で伝えますか。 (した後で伝えることも含めます)		
yes	205	75.4
no	66	24.3
Missing	1	0.4
6. 人形、車、タオル等、自分の好きな物を持っているとお母さんから離れることができますか。		
yes	204	75.0
no	67	24.6
Missing	1	0.4

Table 6. Distributions of scores for verbal communication ability

Score	Frequency	%	Cumulative %
1	4	1.5	1.5
2	59	21.7	23.2
3	205	75.4	98.5
9	4	1.5	100.0
Total	272	100	
Mean :	2.75, SD : 0.47, (N=268)		

No 9 is the missing data

The score is the summation of items 1, 2, and 5 in social development test

Table 7. Distributions of scores for social independence ability

Score	Frequency	%	Cumulative %
0	6	2.2	2.2
1	60	22.1	24.3
2	184	67.6	91.9
3	18	6.6	98.5
9	4	1.5	100.0
Total	272	100	
Mean :	1.80, SD : 0.58, (N=268)		

The score is the summation of items 3, 4, and 6 in social development test.

Table 8. Distributions of total scores for the social development test

Score	frequency	%	Cumulative %
2	3	1.1	1.1
3	5	1.6	2.9
4	31	11.4	14.3
5	73	26.8	41.2
6	99	36.4	77.6
9	61	22.4	100.0
Total		272	100
Mean : 4.55, SD : 0.78, (N=268)			

Table 9. Distributions of response in each item for the cognitive development test

Items	Frequency	%
1. Constitution of two cubes		
pass	267	98.2
fail	5	1.8
2. Conservation		
pass	239	87.9
fail	33	12.1
3. Vocabulary		
pass	270	99.3
fail	2	0.7
4. Speech composition		
pass	95	34.9
fail	177	65.1
5. Understanding of one's possession		
pass	261	96.0
fail	11	4.0
6. Scratching the vertical line (controlling vertical movement)		
pass	184	67.6
fail	88	32.4
7. Scratching the horizontal line (controlling horizontal movement)		
pass	215	79.0
fail	57	21.0

Table 10. Distributions of total scores for the cognitive development test

Score	Frequency	%	Cumulative %
2	1	0.4	0.4
3	31	11.4	11.8
4	70	25.7	37.5
5	152	55.9	93.4
6	14	5.1	98.5
7	4	1.5	100.0
Total	272	100	
Mean : 5.63, SD : 1.15, (N=272)			

Table 11. Distributions of the MI-1 x MP-1 cross data analysis.

Variables	MP-1		Total(%)
	introversion	extroversion	
MI verbal	29 (14.2)	39(19.1)	68(33.3)
1 action	82 (40.2)	54(26.5)	136(66.7)
Total(%)	111(54.4)	93(45.6)	204(100.0)

Chi square= 5.69, df= 1, Significance p= 0.017.

Missinf data = 6.

Table 12. Distributions of the MI-1 X MP-4 cross data analysis.

Variables	MP-4		Total(%)
	active	non-active	
MI verbal	39(19.2)	29(14.3)	68(33.5)
1 action	54(26.6)	81(39.9)	135(66.5)
Total	93(45.8)	110(54.2)	203(100.0)

Chi square= 5.49, df= 1, Significance p= 0.019

Missing data = 7.

Table 13. Distributions of the MI-3 x MP-2 cross data analysis

Variables	MP-2		Total(%)
	harmonious	stubborn	
MI relax	115(55.8)	6(2.9)	121(58.7)
3 tentioned	72(35.0)	13(6.3)	85(41.3)
Total	187(90.8)	19(9.2)	206(100.0)

Chi square= 6.36, df= 1, Significance P = 0.012.

Missing data = 4.

Table 14. Distributions of the MI-3 x MP-3 cross data analysis.

Variables	MP-3		Total(%)
	anxious	non-anxious	
MI relax	84(41.2)	36(17.6)	120(58.8)
3 tentioned	45(22.1)	39(19.1)	84(41.2)
Total	129(63.2)	75(36.8)	204(100.0)

Chi square = 5.74, df = 1 Significance P = 0.017.

Missing data = 6.

Table 15. Distributions of the the S2-score x MI-4 cross data analysis

Variables	S2-score				Total(%)
	0	1	2	3	
MI More care-takers	5(1.9)	45(16.9)	130(48.7)	7(2.6)	187(70.0)
4 Less care-takers	1(0.4)	15(5.6)	53(19.9)	11(4.1)	80(30.0)
Total(%)	6(2.2)	60(22.5)	183(68.5)	18(6.7)	267(100.0)

Chi square = 9.62, df = 3, Significance P = 0.022.

Pearson's r = 0.143, Significance P = 0.009

Missing data = 5.

Table 16. Distributions of the ST-score x MI-4 cross data analysis

Variables	ST-score					Total(%)
	2	3	4	5	6	
More care- MI takers	0(0.0)	24(9.0)	53(19.9)	104(39.0)	6(2.2)	187(70.0)
4 Less care-	1(0.4)	7(2.6)	17(6.4)	47(17.6)	8(3.0)	80(30.0)
Total	1(0.4)	31(11.6)	70(26.2)	151(56.6)	14(5.2)	267(100.0)

Chi square = 9.24, df = 4, Significance P = 0.05.

Pearson's r = 0.107, Significance P = 0.0397.

Missing data = 5.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



序

本報告は、今年度行なわれた「母親の乳幼児との相互作用的行動が、乳幼児の社会性及び知的発達に及ぼす効果についての研究」の結果と、今年度の主課題として現在継続研究中被る「母子相互作用による母性意識の変容過程に関する研究」の研究の概要の2部に分かれている。

前者の研究は、母子相互作用が子どもの発達におよぼす影響を検討することを実現するための前提となるものとして、後者の研究、すなわち、母親の心理的問題を取り扱かう前に、母親の養育者としての子どもへの働きかけの実態とその効果を、子どもの社会性や認知発達に関しておさえておく必要があると考えて実施したものである。さらに、今年度の研究成果をふまえて、現在継続中の「母子相互作用による母性意識の変容過程に関する研究」についての今後の方針について述べてみたい。